

清泉女子大学キリスト教文化研究所年報 第26巻 平成30年
Journal of the Research Institute for Christian Culture, Seisen University, Vol. 26, 2018

「パレスチナと故郷喪失者の文学」

米谷郁子

Palestine and the Literature of Exile

Ikuko KOMETANI

This lecture was on the life and works of Edward Said (1935-2003), a Palestinian American professor of literature at Columbia University, who established the academic field of postcolonial studies. The subject referred to in his *The Question of Palestine* signals three things: a matter significant enough to be dealt with separately, an “intractable and insistent problem,” and something unstable and uncertain. In the lecture I discussed how “the question of Palestine” is closely related to Said’s ideas of “exile” and “dispossession.”

要 旨

この講演は、パレスチナ系アメリカ人の文学研究者で、米コロンビア大学でポストコロニアル批評の創設者となったエドワード・サイードの生涯と研究についてである。彼の生涯と研究は「パレスチナ問題」と深く関わっている。その「問題」とは、サイードによれば、扱うべき重要度の高い事柄であるとともに扱いにくく不安定で不確かな問題でもある。このパレスチナ問題が、サイードの論じた「故郷喪失」と「奪われていること」の思想とどのように関わるのかについて論じた講演録。

以下、【 】内は講演後の付記である。

只今ご紹介にあずかりました、本学英語英文学科の米谷です。今回お話

させていただきます私は、パレスチナ問題の専門でもないどころか、パレスチナあるいはイスラエルに行ったこともありません。聴衆の皆様の中には、私よりもずっとパレスチナの事情について詳しい方も多いと思いますから、あまりものを知らない人間としての立場からお話させていただきますので、お耳を汚すことになるかもしれませんが、しばらくの間お付き合い下さい。

本日の話の概要についてですが、まず、パレスチナ問題の現状をお話しつつ、ヨーロッパの歴史の中に深く埋め込まれたユダヤ人差別が、第二次世界大戦後に他ならぬユダヤ人によるアラブ人差別と抑圧という構造に転移した、ということをお話します。その後、エドワード・サイードという知識人の生涯とその考え方を辿ります。サイードは、故郷であるパレスチナを喪失してアメリカの名門大学の文学部教授として生きつつも、常にパレスチナ問題に取り組み、パレスチナの置かれている不正義に反抗し真実を語ることを知識人としての使命と考えた人でした。彼にとって、文学研究とパレスチナ問題が切り離せない問題であったということを述べたいと思います。最後に、サイードの語ったことの中から、故郷を失った人たちにとっての「故郷」とは何かについて、私たちに示唆を与えてくれる言葉をご紹介します。

●パレスチナ問題の現状

これからのお話は、資料の年表をご覧になりながらお聞きください。

まず、ユダヤ人にとってのシオニズムのお話からです。シオニズムとは、旧約聖書の舞台である現在のパレスチナの地域を「ユダヤ民族」の故郷とみなし、そこにユダヤ民族の国家を建設しようとする考え方のことです。とりわけ第二次世界大戦中に行われたホロコースト、ナチス＝ドイツによるユダヤ人虐殺の後、生き延びたユダヤ人たちは、自らのシオニズムの実現、自らの故郷・故国の建設をより強力に推し進めました。そして、ユダヤ人虐殺に対する西欧世界の罪悪感を後押しとして、アラブ系パレスチナ人たちの住むパレスチナの地域に、アラブ系住民を押しつけ無視する形で、ユダヤ人たちの国家「イスラエル」が、半ば無理やりに建国されたのです。ユダヤ人が「故国」という考えにしがみつくとその激しさと熱意によって、パレスチナの地が神聖な約束の地イスラエルであるという意識が、シオニストたちをイスラエルの地に引き寄せてきました。見逃してはならな

いのは、この地をめぐり、三枚舌外交を展開したイギリスの戦争責任です。イギリスは、1915年のフサイン・マクマホン書簡で中東におけるアラブの独立を約束しながら、1917年のバルフォア宣言においては、ユダヤ人がパレスチナに「民族的故郷」を樹立することに対し支持を表明しました。現在のパレスチナ問題の根底にあるのは、こうしたイギリスの外交がもたらした負の遺産であり、イギリスがパレスチナ問題に関して戦争責任を負っていることを、私たちは決して忘れてはなりません。

さて、そこで無視され見えないものとされてきたのは、パレスチナに住み続けてきたパレスチナ人の存在です。パレスチナ人の、民族としての生存要求ならびに居住する土地と人権に対する要求は、現在激しく侵害されています。パレスチナの植民地化は、イスラエルの建国で終わるところか、むしろそれ以降に激しさを増しているからです。そしてイスラエルは現在、植民地征服をやめるところか、そこに神の約束の成就をみているのです。エドワード・サイードの言葉を借りれば、オリエンタリズムをベースとした差別意識のせいで、「アラブ人はオリエン特人であり、それゆえヨーロッパ人やシオニストたちよりも人間的に劣り、価値もない。彼らは裏切りやすく、改心もしない」(1979:28)という決めつけがまかり通るようになっていきました。サイードの言葉から引用します。

シオニズムとイスラエルから連想されるのは、知と光であり、「わたしたち」が理解し、それを求めて闘う目標といったイメージであった。これとは対照的に、シオニストの敵たちは、オリエン特の専制政治や官能性、無知蒙昧や後進の形態を備えた異質の精神の、たんなる愚かな 20 世紀版にすぎなかった。(1979:29、『パレスチナ問題』45)

ヨーロッパ人の中に深く埋め込まれた反ユダヤ主義が、この時代、アラブ人という人種的に見て類似の人物像に転移し始めた、とサイードは述べます。そして、この構図は正しいだろうと、容易に想像されるものでもあります。

サイードのこうした一連の発言は、ユダヤ人のシオニズムと、18世紀以来のヨーロッパ帝国主義・植民地主義とのつながりを明確にしようとす

るものでした。サイドによれば、シオニズムと西洋の植民地主義は、同じ構造を共有しているのです。即ち、

- (1) アラブ人住民は存在しない
 - (2) 「なにもない」領域を補完するという西洋・ユダヤ人の植民地主義
 - (3) シオニストによる復興計画がそこに重なっていく
- という筋道から成り立つ構造のことです。

ユダヤ人のシオニストたちは、過去にヨーロッパ人たちが、アメリカやアジアやオーストラリアやアフリカにおいてそうしたように、土地には誰も住んでいなかった、もしくは土地には、その土地を有効利用できない未開民族が住んでいると世界に認めさせたうえで、原住民を「文明化」するためという名目で、原住民から土地財産を没収し続けています。パレスチナからアラブ人の存在の痕跡をとことん消し去ろうとする運動をすすめてきたのです。これらのシオニズムの侵略過程を、ヨーロッパ諸国の帝国主義・植民地主義と同じ構図であるとして、サイドは確認していきます。

パレスチナ人がイスラエルの支配に抵抗できない理由として、サイドは、シオニズムの「詳細に最後の一ミリにいたるまで探査し、定着させ、計画し、建設しつづける」(1979:95, 『パレスチナ問題』132ページ) 極めて精緻な政策に対して、準備が全くできていなかった、としています。あらゆる抵抗運動がテロ行為扱いされ、イスラエル軍が「テロ撲滅」の口実のもとにパレスチナ人地区や難民キャンプを襲撃するという状況は、今にいたるまで続いています。

【ただ、ここで留意すべきことは、現在イスラエルはナチスと同じように「民族浄化」を続けてはいるけれども、ナチスがしたような「虐殺」をしているのではないという点である。イスラエルはパレスチナ人を「殺そう」としているのではなく、その抵抗力をそぐために「彼らの物理的身体を損なおう」としている。人権を無視する形でパレスチナ人が最低限、「生物」として生きていけるように実に巧妙・綿密に計算し、抵抗したら懲罰を加えるという占領統治の手法を展開しているということで、この現状についてはジャスビル・プアール (Jasbir K. Puar) による *The Right to Maim* (Duke University Press, 2017) という著作の中で綿密に考察されている。ナチスとイスラエルのそうした重なりとズレには留意するべきである。】

1993年8月30日のオスロ合意は、パレスチナ人とイスラエル人による相互承認の合意、和平協定の締結、西岸地区とガザ地区にパレスチナ人の暫定自治を認めるものでした。しかしながら、これはイスラエル国家の警察機構にPLOが組み込まれただけであり、パレスチナ人の状況は変わらず、むしろイスラエルによる統治の強化のもと、パレスチナ人の移動の自由が奪われ、抑圧的占領政策が合法化されただけであって、イスラエルからは過去の暴力的占領行為に関するいかなる謝罪もありませんでした。故郷を喪失したパレスチナ人に対する認知もありませんでした。パレスチナ人側からの大きな抵抗運動もありました。現代における大きな反植民地反乱のひとつであるインティファダ（パレスチナ人の民衆闘争、蜂起を意味し、三年間続く）は、パレスチナ人の抵抗権そのものです。しかしながら、イスラエルによるパレスチナの占領統治は、サイード死後、より深刻化してきています。2017年現在も、イスラエルの内部ならびにイスラエル占領地区には孤立し故郷を失ったパレスチナ人がおり、さらに全世界に離散したパレスチナ人がおり、彼らにとって絶滅政策の暴力を振るいつづけるイスラエルに対して、和解や妥協など考えられない状況にあります。オスロ合意が破たんし、和解へのロードマップも破たんした現在、パレスチナ人テロリストたちは自爆攻撃を繰り返し、「野蛮なテロリスト」というレッテルを貼られています。しかし野蛮なのはパレスチナ人ではありません。彼らはイスラエルによって野蛮な状態に置かれているのであり、未来を奪われているからこそ、テロリストとなって自爆テロを繰り返しているのです。まさにイスラエルが、自らの国を攻撃するテロリストを育てているのであって、さらにそうしたテロを口実として、パレスチナ人に対する抑圧が進んでいることを考えると、自国民の犠牲も見込みながら「生物」としてパレスチナ人を非人道的に扱い弾圧しつつ、同時に戦争犯罪という糾弾・証拠立てを巧妙に避けようとしているイスラエル政府の非道さは、まさに言葉を失うものがあります。

【ヨルダン川西岸の現状は以下の通り。西岸においてこれまでにイスラエルにより公式に建設された入植地は131地域。1993年のオスロ合意で、西岸地区はA、B、Cの3つの地区に分けられた。イスラエルが完全に管理するC地区は、西岸地区全体の61%を占める。C地区では「建築許可がない」ことを口実に、パレスチナ人の住宅破壊が行われている。当時11

万人だった西岸の入植者は増え続け、現在 59 万人にのぼっている。占領地に自国民を移住させることは国際条約で禁止されているが、イスラエルはさまざまな形で容認している。2002 年に建設が始まった分離壁の全長は、最終的に 710km になると計画されている。分離壁は国際的に認められている境界線から大きく外れて建設されているため、同じ西岸地区の中にも分断された地域が生じている。

封鎖された「巨大な監獄」とも称されるガザ地区の現状は以下の通り。ガザ地区の地下水のうち、90% が飲み水に適さないほど汚染されている。下水処理や浄水施設が電力不足で機能していないことが背景にある。生活排水は海に直接放出されるため、海岸の汚染も深刻化している。労働人口の 42% が失業状態にあり、特に若者の失業者は 58% に達し、世界銀行は「地球上で最悪の失業率」との懸念を表明している。ガザ住民の 80% は何らかの支援を受ける立場にあり、貧困率は極端に高い。就業者のうち 40% ちかくは公務員として雇用されているが、給与の未払いや遅延は恒常化しており、社会問題になっている。ガザ地区で電気が使用できる時間は、一日のうちで 4 時間ほどになっている。ガザ地区の発電所は、2014 年のイスラエルによる攻撃で破壊されている。燃料の輸入も制限されている。以上、アムネスティ・インターナショナルが公表している情報、及びパレスチナ情報センターのサイトを参照した。】

この状況にあっても、エドワード・サイードは、パレスチナ人の未来が、イスラエル人も密接にからまっている、と主張しつづけてきました。ともにユニークな歴史的環境をもつ双方のコミュニティは、みずからの現実と折り合いをつけ、この地で両者とも共存していくことこそが永続的な和平に到達できる唯一の道であると訴えたのです。このサイードなる知識人は、どのような人だったのでしょうか。エドワード・サイードその人に焦点を当てる前に、ここでドキュメンタリー映画『OUT OF PLACE』の一部をご覧いただき、サイードと故郷喪失者の経験を皆様と想像してみたいと思います。

●サイードとは誰か

故郷を喪失した知識人

サイードは、パレスチナ人のコミュニティの中にあって、父親だけがア

メロカ国籍を持ち、ムスリムではなくプロテスタントの裕福な実業家という、マイノリティに属する家に生まれました。言うならば、サイドはマイノリティで故郷喪失者となったパレスチナ人のなかにあってもさらにマイノリティである、ということが出来ます。サイドの主要な著作は、『オリエンタリズム』です。「オリエンタリズム」というのは、18世紀の終わりから現代にかけて、西洋がオリエンタ地域（中東）を理解するときに駆使した言説で、それは平たく言うと、ヨーロッパの方が、未開の中東地域の人間よりも中東の人間のことを理解している、ということの意味します。いいかえると、西洋の学問的な知は、オリエンタとは何か、中東とは何か、その本質なり特質を立ち上げようとします。そしてそうすることによって、オリエンタの現実を構築します。現実を構築されてしまうと、それはオリエンタ・中東の人たちにしてみれば、植民地化とかわりありません。と同時に、ヨーロッパ人は何やらわけのわからない異質な他者としてのオリエンタを神秘化します。神秘化することで、ときにそれを芸術作品として賞賛すらします。しかしそうすることによって、オリエンタの人間は自分達と同類ではないという形で、オリエンタを西欧文明の世界から分離する壁のようなものが立ちあげられ、分離と排除のメカニズムが働くのです。これも植民地化の一つの形です。したがって、オリエンタリズムとは、切り分け、分離し、差別するメカニズムなのです。分離することで一方が他方を支配するメカニズムが生まれます。この分離と支配と差別の構図に貢献するのが、オリエンタとは何かという知、すなわちオリエンタリズムです。これに対してサイドは、西洋と東洋は長い歴史の中で相互にまじりあい、交流があったし、文化は絶えず混じりあう、そのハイブリット性こそが文化の特質と言えるものだと、抗弁しました。

ここでイスラエルとパレスチナの問題に再びすこし入り込みますと、イスラエルはいまも分離壁を作り続けています。あの分離壁は、パレスチナ人のテロリストがイスラエルに入らないようにしているというのが表向きのイスラエル側の理屈ですが、実際には、分離壁によってパレスチナ人の移動の自由を禁止し植民地支配をする人種分離政策の道具、つまりアパルトヘイト政策なのです。

サイドは、西洋中枢のエリート大学であるコロンビア大学という「中心」から発言するパレスチナ人としてあり続けました。彼は、悠々自適の

円熟した晩年を過ごしませんでした。それとは全く異なる、あるいはそれとは対極にある怒れる晩年、妥協も和解も円熟もすべてを拒否した、抵抗の晩年を過ごしたのです。サイードの場合、抵抗というのがひとつのキーワードなのですが、それをさらにつきつめていくと、故郷喪失の概念に行きあたります。サイードの知識人論というのは、高学歴の人間が企業や官公庁に入って、その知を最大限活用して働くという従来の「知識人エリート」のイメージを否定して、常に抑圧された側に立って、権力に対して真実を語るのが知識人であると主張しました。そのモデルとして、故郷喪失者を考えたのです。つまり、さまざまな理由で故郷・故国を去ったり亡命したり、あるいは故国が亡くなって難民となって、異国・他国で暮らす人間のことです。知識人というのは、現代の世界における故郷喪失者であり、故郷喪失者として行動し発言するとき、その人は知識人となるのです。サイードのこの故郷喪失論には、自らアメリカで暮らすパレスチナ出身のアラブ系大学人として生きざまが反映しているだけでなく、そこにパレスチナ問題が反映していることは言うまでもありません。

サイードは、かつてはパレスチナ国民評議会議員の一員でした。このころには、パレスチナの独立を目指して、二国家解決案つまりユダヤ人はイスラエルをつくり、アラブ人はパレスチナの国を作るという、ふたつの国家の実現を目指していたのですが、やがて二国民一国家案を提唱しました。イスラエルの長い歴史の中で、ユダヤ人とパレスチナ人はまじりあってきたのであり、両者を分離することなどできなくなっているからです。ふたつの民族で一つの国家を作るというのは、現実的な提案でした。サイードはナショナリストではありません。民族的アイデンティティというものをサイードは嫌っています。誰もが複数のアイデンティティを持ち、ひとつに固定されないさまざまなあり方をハイブリッド的に融合している存在だと考えているのがサイードです。政治的抵抗運動への連帯行為として参加していたのです。けれども彼はのちに、指導層との論争のあと、辞任しています。サイードは、政党なり党派にみずからを捧げることには慎重だったと述懐しています。この姿勢は、知識人にとって必要な批判的距離というものを示していると思われます。物事を冷静に正しく眺めるために必須の批判的距離が、知識人としてのサイードにとって必要なものであったとするなら、「故郷」に対して「距離を取る」ことも、サイードにとっては

必要なことだったのでしょか。

●故郷喪失者の文学

「テキストは世界の中にある。世俗世界的なのである」(1983:35)。文学研究者、批評家とは、ただ単に文学作品を解釈したりテキストを翻訳するだけの存在ではありません。文学作品も文学研究者も、それが語っている世界の一部なのです。つまり、文学作品も文学者自身も、自らが生きる時代の社会的背景のなかにとりこまれています。サイドはこのことをつきつめて考えていった知識人でした。サイドの文学研究は、文学作品を単なる「時代背景を反映したもの」として捉えるのではなく、自らの置かれた時代背景に存在する不正義に対して、その不正義を暴露するもの、不正義に対して対抗できるものとしてありました。それゆえに、サイドにおける文学は、権力をふるい支配するメインストリームの勢力に対して周縁的な性格を持ち、同時に、周辺的な性格を持つ虐げられた人たち、マイノリティの人たちにとっての道しるべともなったのです。

at home [本国で／くつろぐ] とか in place [適当な所に／当を得た] という語句に付随するあらゆるニュアンス、すなわち安心・適切性・所属・連帯・共同体など。Belonging to [所属する]、あるいは in a place [ある場所にいる]、being at home in a place [ある場所に収まる、くつろぐ] という語句によって伝えられる意味や思想の及ぶ範囲を確認できるのは、ひとえに文化のなかにおいてである。(1983:8『世界・テキスト・批評家』13-14)

アウトサイダーとしての知識人のありようを決定するパターンの最たる例は、故郷喪失という状態である。それは決して順応しない状態であり、現地人が暮らすところの、うちとけた親密な世界とは無縁の外側に自分がいると感じる状態である。この比喩的な意味での故郷喪失とは、知識人にとっては、安住しないこと、動き続けること、つねに不安定で、また他人を不安定にさせる状況をいう。もとの状態へと、おそらくはもっと安定してくつろげる状態へとあともどりはできない。ああ、悲しいかな、もうすこや

かに安住することはできないし、新しい故郷や環境と一体化することもないのだ。(1994:39, 『知識人とは何か』 93)

サイドは、知識人としても、また人間としても、故郷との心地よいなれ合い状態から身を引くことを終生主張し続けた人でした。

故郷喪失者は、既に残してきたものと、いまここにあるアクチュアルなものとの関係からながめるために、物事を単独のかたちでながめることのない、二重のパースペクティヴが存在する」(1994:44, 同 104)

故郷喪失とは、「人間と生まれ故郷とのあいだにむりやりもうけられ、癒されることのない亀裂」なのですが、そのくせ、現代西洋文化の名作は、その大半が故郷喪失者の手によるものであると、サイドは論じています。

例えば、『ガリヴァー旅行記』で有名なジョナサン・スウィフト。スウィフトは、アイルランドに追放された立場から、当時のイギリス社会の理不尽さをその諷刺文学の中で徹底的にこき下ろしました。サイドはスウィフトについて、「創造的憤怒とでもいうべきものから恩恵をこうむっていることは言うまでもなく、そこから開花した精神を示している」(『知識人とは何か』 94) と言っています。先ごろノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロも、いまを代表する「故郷喪失者」です。彼は、日本とイギリスの二重国籍を望んだのに果たされなかったと言っていますが、精神的な意味での二重国籍が彼にとって小説を書く原動力になったのだと言っても間違いではないはずです。また、私の専門であるシェイクスピアも、故郷を喪失した登場人物たちの救済を盛り込んだ喜劇を数多く書いています。自由奔放な批評の能力を發展させ、国家的・党派的なものが個人に対してふるう搾取から自由な、解き放たれた知的営みを發展させるために、スウィフトだけでなく、文学者、知識人たる者は、故郷喪失状態から恩恵を被るだけでなく、ある意味で故郷喪失状態を必要としている、とサイドは言うのです。それは、以下の引用にも明らかです。

故郷喪失は、「冬」の精神である。このなかでは夏や秋の情緒は、

近づく春の気配ともども、すぐ近くに感じられるのだが、しかし手に入らない。おそらくこういうかたちでいわんとしているのは、故郷喪失の人生が、異なる暦にしたがって動き、故郷での人生に比べて、四季に左右されることなく、落ち着いているということだ。故郷喪失は、習慣的な秩序の外で起こっている生活である。それはノマド的で、脱中心化され、対位的である。またそれに慣れてしまうやいなや、そのあらゆる力が安定した生活をふたたび揺さぶるのである。(1984:55)

●知識人と文学の使命

知識人の課題は、平等と正義の主張を「現実の状況と関連づけることである」(1994:71)とサイドは述べています。「権力に対して真実を語ることは、パングロスの理想論の問題ではない。それはさまざまな選択肢を慎重に勘案し、正しい選択肢を見つけ、それがもっとも効果的で、正しい変革をもたらさう状況において、知的に代弁＝表象することである」(1994:75『知識人とは何か』163-64)。

【ここで言及されたパングロスとは、ヴォルテールの小説『カンディード』に出て来る饒舌な家庭教師の名前。物語の中で繰り返される不幸や災難にもかかわらず、パングロスは「tout est au mieux (すべての出来事は最善)」であり、「自分は le meilleur des mondes possibles (最善の可能世界)において生活している」と主張し続ける。カンディードとパングロスがリスボンで遭遇する大地震の場面は1755年11月1日に発生したリスボン大地震に基づいている。この大震災に衝撃を受けたヴォルテールは、ライプニッツの楽天主義に疑問を抱き、それがこの小説の執筆に繋がった。東日本大震災後の世界を生きる日本人にとっても重要な作品である。】

こうすることは、みずからの故国の政府も含めた、政治にたてつくことも意味します。あるいは自らの民族も含めた「民族」という概念の党派性にたてつくことでもあります。実際に、オスロ和平合意時に、まさにイスラエルとパレスチナ人との長い闘争に終止符が打たれるものと浮かれ騒ぐ人々が多かった時期に、サイドの批判的言論は、パレスチナ人自身へと向けられました。その後、イスラエルによるパレスチナ植民地化政策が進められる中であっても、サイドは必ずしも常にパレスチナのナショナリ

ズムの擁護者ではありませんでした。自爆攻撃を、パレスチナ解放の大義をひどく傷つけるものとしてつねに批判していたのです。

【このサイドの知識人としての態度は、アイヒマン裁判の傍聴後に発表した論考において、「悪の凡庸さ」の指摘だけでなく、一部のユダヤ人指導者がナチスに協力していたことにも注目し、加害者だけでなく被害者が抱えた問題を冷静に分析したハンナ・アーレントを想起させる。アーレントも、その知的態度のために多くの反発を招いた。】

この結果、年表にあるように、1996年には、PLOのアラファト議長によって、サイドの著作はパレスチナで発禁・販売禁止になりました。もはや故国パレスチナさえも、サイドにとっては安住の地ではなくなったのです。それでは、故郷を離れたサイドのような知識人にとって、故郷とはどのようなものだったのでしょうか。そこに結論という安住の地はないでしょうけれども、そろそろ最終セクションとしたいと思います。

●知識人にとっての「ふるさと」とは

サイドの一生は、多くのパレスチナ人と同様、「立ち退き、土地の没収、追放、アイデンティティの模索」の日々でした。テロではなく、国際法上の普遍的諸原則に訴え、その中でパレスチナ人を苦しめる不正について指摘すること。文学研究者であったサイドの批評活動は、イスラエルによって植民地化されているパレスチナ人の被る不正義を糾弾することと切り離せないものでした。そして、彼の批評活動は、パレスチナ人の利益のみを代弁するような、パレスチナ人のためだけに発せられた狭いものではなく、同じように周辺化された他の民族にとっても重要な言論となっていたのです。

今、パレスチナ人自身がパレスチナ人の物語を語る許可を要求し続けています。パレスチナ人の物語はこれまで、植民地支配者としてのイスラエルと合衆国が習慣的に担ってきました。その中では、パレスチナ人の声は抑圧されてきました。今必要なのは、パレスチナ人が彼ら自身の物語を語ることのできる空間を、交渉によって獲得しようとする介入です。そのために、サイドはイスラエルのユダヤ人自身が経験してきたホロコースト、流浪、故郷喪失、収奪、強制退去の歴史を、パレスチナ人の事例に応用して訴えようとしました。

サイドは、パレスチナ人に対して語りかけています。

あなたが慣れようとしているのは、アウトサイダーと共存して暮らすこと、そして内側にある、あなた自身のものといえるものとは何かを、たえず定義しつづけることである（1986:53, 『パレスチナとは何か』 89)

帰還権が認められたら、あなたはパレスチナに帰りますかと聞かれて、サイドは、帰らないと答えています。ニューヨークで故郷喪失者として暮らす方が性に合っていると答えているのです。本人は、根無し草的な生き方を好んでいるコスモポリタンであり、旅人なのです。これはある意味では、土地を奪われたり、住んでいるところから追放されたりした人々の側に立つことを意味します。そうした抑圧、アパルトヘイト、植民地化の暴力に抗議するサイドはまた、out of place、つまりどこにも所属しない故郷喪失者の生き方になじんでいて、悲しみや苦しみのみならず、ある種の喜びも見出しているのです。

最後に、エドワード・サイドが幾度となく引用した12世紀のザクセン出身の修道士、サン・ヴィクトワールのフーゴの言葉を引用して終わりたいと思います。

自分の故郷がすばらしいと感じているものは、まだ弱々しい未熟者にすぎない。あらゆる土地が自分の故郷であると感じるものは、すでに強くなっている。しかし世界が残さず外国の地であると感じる者は、完璧である。弱々しい魂の持ち主は、自分の愛を世界の特定のひとつの場所に固定する。強い人間は、自分の愛をあらゆる場所に広げる。完璧な人間は、自分の愛を消滅させるのである。（『文化と帝国主義』 2・244）

ご清聴ありがとうございました。

参考文献（発表年代順に記載）

- (1) *The Question of Palestine* (Times Books, 1979). 『パレスチナ問題』 杉田英明訳、みすず書房、2004年.
- (2) *After the Last Sky: Palestinian lives* (Pantheon Books, 1986). 『パレスチナとは何か』 島弘之訳、岩波書店、1995年 / 〈岩波現代文庫〉、2005年.
- (3) *Culture and Imperialism* (Knopf, 1993). 『文化と帝国主義（1・2）』 大橋洋一訳、みすず書房、1998年-2001年.
- (4) *Representations of the Intellectual: the 1993 Reith Lectures* (Vintage, 1994). 『知識人とは何か』 大橋洋一訳、平凡社、1995年 / 〈平凡社ライブラリー〉、1998年.
- (5) *The Pen and the Sword: Conversations with David Barsamian* (Common Courage Press, 1994). 『ペンと剣』 中野真紀子訳、クレイン、1998年 / 筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、2005年.
- (6) *The Politics of Dispossession: the Struggle for Palestinian Self-determination 1969-1994* (Chatto & Windus, 1994). 『収奪のポリティックス——アラブ・パレスチナ論集成 1969-1994』 川田潤（他）訳、NTT出版、2008年.
- (7) *Covering Islam: How the Media and the Experts Determine How We See the Rest of the World*, Fully Rev. ed. (Vintage, 1997). 『イスラム報道（増補版）』 浅井信雄・佐藤成文・岡真理訳、みすず書房、2003年.
- (8) *Out of Place: A Memoir* (Knopf, 1999). 『遠い場所の記憶——自伝』 中野真紀子訳、みすず書房、2001年.
- (9) 『パレスチナへ帰る』 四方田犬彦編訳、作品社、1999年.
- (10) *The End of the Peace Process: Oslo and After*, (Pantheon Books, 2000). *Reflections on Exile and Other Essays* (Harvard University Press, 2000). 『故国喪失についての省察（1・2）』 大橋洋一（他）訳、みすず書房、2006年-2009年.
- (11) *From Oslo to Iraq and the Road Map* (Pantheon Books, 2004). 『オスロからイラクへ 戦争とプロパガンダ 2000-2003』 中野真紀子訳、みすず書房、2005年.
- (12) *Power, Politics, and Culture: Interviews with Edward W. Said*, with Gauri Viswanathan (Pantheon Books, 2001). 『権力、政治、文化——エドワード・W・サイード発言集成（上・下）』 大橋洋一ほか訳、太田出版、2007年. - ゴーリ・ヴィスワナタン (Gauri Viswanathan) 編

- (13) *Culture and Resistance: Conversations with Edward W. Said*, with David Barsamian (South End Press, 2003). 『文化と抵抗』 大橋洋一 (他) 訳, 筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉, 2008年.
- (14) 『サイド自身が語るサイド』 大橋洋一訳, 紀伊国屋書店, 2006年.

◆パレスチナ周辺図



【パレスチナ情報センター作成の地図を、許可を得て転載する】

年号	エドワード・サイード個人年譜	パレスチナ問題関連の出来事
1914		第一次世界大戦勃発
1915		フサイン＝マクマホン書簡
1917		パルフォア宣言
1920		英（イギリス）委任統治開始
1935	英国委任統治領下の西エルサレムで生まれる	
1936		パレスチナ各地で委任統治およびシオニスト移民に反対するゼネスト発生
1941	エジプト・カイロのゲジール初等学校入学	
1943	レバノンでの避暑開始	
1945		第二次世界大戦終結、シオニスト合同軍事組織が対英反乱開始
1946	アメリカン・スクール入学	
1947	パレスチナの聖ジョージ学園に編入	国連パレスチナ分割決議案採択。
1948	西エルサレム、ユダヤ人民兵組織の管轄下に入り、サイード一家は家を追われる	イスラエル建国。パレスチナ難民発生、英軍パレスチナ撤退→第一次中東戦争
1949	カイロのヴィクトリア・カレッジに入学	
1950		イスラエル、海外にいるパレスチナ人の土地の強制収用を進める不在者財産法制定
1951	渡米、マウント・ヘルモン入学	
1953	プリンストン大学入学	
1954		英軍スエズ運河撤退、ナセル政権成立
1956		スエズ動乱勃発（第二次中東戦争）
1957	プリンストン卒業	
1958	ヨーロッパ旅行、ハーヴァード大学大学院入学	レバノンで小規模内戦
1959	友人のファリド・ハッダド医師、獄中拷問死	
1962	一家はカイロを引き払い、ベイルートへ移転	
1963	ニューヨークに居住、コロンビア大学教員に	
1964		パレスチナ解放機構（PLO）設立
1967		第三次中東戦争、イスラエル軍はガザ・西岸地区、ゴラン高原、シナイ半島占領。
1968		対イスラエルの大規模な抵抗運動開始
1969		アラファト PLO 議長就任
1970		ヨルダン内戦。ヨルダン政府と対立したパレスチナ武装組織はレバノンへ。
1973		第四次中東戦争

1975		レバノン内戦（17年戦争）
1977	パレスチナ民族評議会（PNC）議員となる	
1978	『オリエンタリズム』出版	キャンプ・デービッド合意
1979	『パレスチナ問題』出版	
1981	『イスラム報道』出版	
1982		イスラエル、レバノン侵攻
1983	『世界・テキスト・批評家』出版	
1984	ユダヤ防衛同盟、サイードの大学研究室に放火	
1986	『パレスチナとは何か』出版	
1987		第一次インティファダ。投石などによる象徴的抵抗から「石の蜂起」とも。
1991	白血病の診断を受け、PNC 辞任	湾岸戦争
1992	エルサレム再訪	
1993	『文化と帝国主義』出版	オスロ合意（2000年、破綻）
1994	『知識人とは何か』出版	ヘブロン・イブラーヒームモスクでユダヤ人入植者が銃乱射、虐殺事件に。
1996	サイード、パレスチナ訪問。アラファト、サイードの著作を発禁・販売禁止に。	
1999	ダニエル・バレンボイムとともにワイマールでクラシック音楽のワークショップ「ウェスト・イースタン・ディヴァン」を開く	
2000		第二次インティファダ。自爆攻撃の増加
2002		イスラエル・シャロン政権、ジェニンの虐殺を指揮、分離壁の建設を開始。
2003	白血病により死去	
2006		パレスチナ議会選挙でハマス圧勝。
2007		パレスチナ自治政府、ハマス支配のガザ地区及びファタハ支配の西岸地区に事実上の分裂。イスラエル、ガザ地区を封鎖。
2008		イスラエル軍、空爆・地上侵攻を伴うガザ紛争発生、1300人のパレスチナ側犠牲者、イスラエル側は10人の犠牲者。
2014		大規模空爆によるイスラエル軍のガザ侵攻、2000人以上のパレスチナ側犠牲者、イスラエル側は約70人の犠牲者。